

〇県の訪問看護ステーションにおける 精神疾患患者の利用に関する実態調査

渡邊久美, 住吉和子, 森本美智子, 岡野初枝

要 約

精神疾患患者への訪問看護における問題を検討する基礎資料とするため, 〇県の訪問看護ステーションにおける精神疾患患者の利用状況と訪問看護師の利用者への社会資源導入経験の有無を明らかにすることを目的として調査を実施した。調査は2003年9月に質問紙郵送法により実施した。対象とした126施設のうち, 回答の得られた64施設(回収率50.8%)の1か月間の利用者総数は2,471人であり, そのうち精神疾患患者は743人(30.1%)で, 精神疾患のうち痴呆の占める割合は488人(65.7%)であった。施設単位では精神疾患患者の利用は60施設(93.8%)にあり, 疾患の内訳は痴呆が57施設, うつ病が28施設, 統合失調症が17施設等であった。また, 訪問看護ステーション開設時からの精神疾患患者への社会資源の導入経験は約半数の34施設(53.1%)にあった。少数の訪問看護師からは, 精神疾患患者への対応の困難さを感じていること, 精神科看護に関する情報を求めていることなどの意見があった。訪問看護における精神科看護のニーズは今後も高まることが予測され, 専門的技術の向上や地域における専門施設との連携が求められる。

キーワード: 社会資源, 訪問看護, 精神疾患, 実態調査

緒 言

訪問看護ステーションが1992年から開設されて以来, その数は着実に増え続けており, 5,571か所が開設され, 利用者数は約27万人にのぼっている(2004年4月)¹⁾。訪問看護サービスは介護保険や医療保険制度のもとに病院や診療所からも行われるが, 大半は訪問看護ステーションにより担われ, 我が国が今後たどる少子高齢社会において, さらに需要が高まることが予測される。訪問看護では, 利用者へのケアと同時に介護家族へのケアも重要であり, これは近年多く研究報告されている高齢者虐待^{2,3)}の側面からも喫緊の課題となっている。

野崎ら⁴⁾は, 介護者の虐待がみられながら社会資源の活用が困難であった事例を報告しているが, これは訪問看護師が, 精神症状を呈する利用者の認知障害や家族の抱く世間体への配慮などから対応に苦慮した事例である。訪問看護ステーションの利用者の約半数は循環器系疾患で, 精神障害者への対応には多くの訪問看護ステーションで戸惑いを感じていることが指摘されており¹⁾, 本事例もそのような訪

問看護師の戸惑いを表したものと見える。日本訪問看護振興財団が調査した利用者の疾病大分類では, 「精神および行動の障害」は1割以上を占めており⁵⁾, また, 精神科長期入院患者のうち7万2,000人を地域でケアする方針が示されている今日, 地域の訪問看護ステーションが精神障害者へサービスを提供する機会は増していくと思われる。精神疾患患者家族の介護負担感は大きく^{6,7)}, 訪問看護師による家族への精神的支援や適切な社会資源の導入など, これらの問題への対応が求められる。

以上のような背景から, 訪問看護ステーションの利用者のうち, 精神疾患患者への社会資源の導入に関する現状と課題を明らかにする必要性があると考えた。本研究では, その基礎資料として, 〇県の訪問看護ステーションにおける精神疾患患者の利用状況と訪問看護師の利用者への社会資源導入経験の有無を明らかにすることを目的とした。

方 法

2003年8月時点で〇県訪問看護ステーション連絡

協議会に入会している135施設の訪問看護ステーションのうち、休施設を除く126施設を対象に、9月上旬に施設長へ研究の趣旨を明記した依頼文と調査票を郵送し、同意の得られた場合に10日程度のうちに個人研究室宛にFAXで回答するよう依頼した。倫理的配慮として、データの秘密厳守を書面にて約束した。

調査項目は①1か月間の全利用者数、②1か月間の延べ訪問回数、③1か月間の精神疾患患者の疾患毎の利用者数、④精神疾患毎の延べ訪問回数、⑤精神疾患患者への社会資源導入経験の有無、⑥訪問目的、⑦その他自由記載等である。

なお、対象とした126施設の訪問看護ステーションは〇県の10市に85施設、15郡に41施設が設置されていた。市部では2つの市で61施設を占めていた。

結 果

調査票の回答は126施設のうち64施設から得られ、回収率は50.8%であった。2施設より「該当対象者なし」との電話連絡を受け、分析対象からは除外した。

1. 対象の背景

訪問看護ステーション（以下、施設）の平均開設年数は5.8年であった。開設年数毎の施設数を表1に示す。〇県における訪問看護ステーション数は、我が国での訪問看護ステーションの開設開始時期である1992年から、年間5施設から10施設のペースで徐々に増加する傾向にあり、最近3年間の増加率はやや緩やかになっていた。

併設事業所を有する施設は58施設（90.6%）であり、その種類としては居宅介護支援事業所が47施設と最も多かった。24時間の連絡体制がある施設は53施設（82.8%）で、医師との連絡体制がある施設は

表1 訪問看護ステーションの開設年数

	施設数	(%)
2年未満	5	(7.8)
2年以上-3年未満	1	(1.6)
3年以上-4年未満	10	(15.6)
4年以上-5年未満	8	(12.5)
5年以上-6年未満	9	(14.1)
6年以上-7年未満	10	(15.6)
7年以上-8年未満	8	(12.5)
8年以上-10年未満	5	(7.8)
10年以上	8	(12.5)
合 計	64	(100.0)

表2 常勤訪問看護師数

	施設数	(%)
1人	7	(10.9)
2人	22	(34.4)
3人	23	(35.9)
4人	7	(10.9)
5人	3	(4.7)
6人	1	(1.6)
7人	0	(0.0)
8人	1	(1.6)
合 計	64	(100.0)

表3 非常勤訪問看護師数

	施設数	(%)
0人	16	(25.0)
1人	14	(21.8)
2人	15	(23.4)
3-4人	9	(14.1)
5-6人	5	(7.8)
7-8人	1	(1.6)
9人以上	4	(6.3)
合 計	64	(100.0)

58施設（90.6%）であった。

1施設あたりの常勤・非常勤訪問看護師数について表2および表3に示す。職員構成は常勤の訪問看護師が2人から3人の施設が最も多く7割近くを占めた。また非常勤の訪問看護師がいない施設は25%であり、1人から2人配置されている施設は半数近くであった。また、訪問看護師以外の職種として、1人から2人の事務職を配置する施設は12.5%であり、作業療法士が14.3%、理学療法士が12.5%の施設に若干名配置されていた。

2. 1か月間の利用者と精神疾患患者の割合とその訪問回数

64施設の1か月間の利用者総数は2,471人で、そのうち精神疾患患者は743人（30.1%）であった。また、精神疾患のうち痴呆の占める割合は488人（65.7%）であった。1か月間の延べ訪問回数は15,595回であった。疾患別の利用者数と疾患別の延べ訪問回数および平均訪問回数を表4に示す。

施設単位では、60施設（93.8%）において精神疾患患者の利用があり、疾患の内訳は痴呆が57施設で最も多く、痴呆以外では統合失調症が17施設、うつ病が28施設、躁うつ病が8施設、心気症が6施設、その他（アルコール依存症、人格障害等）が15施設

表4 精神疾患別にみた利用者数と延べ訪問回数および平均訪問回数

n = 63 (無効回答1を除く)

	統合失調症	うつ病	躁うつ病	心気症	痴呆	人格障害	その他
利用者数(人)	124	61	8	10	488	18	33
延べ訪問回数(回)	514	367	28	49	2993	141	169
平均訪問回数	4.2	6.0	3.5	4.9	6.1	7.8	5.1

であった。1か月間の利用者総数別に集計した施設数を表5に示す。20人以下が12施設、21人から40人が最も多く27施設で、41人から60人が13施設、61人から80人が7施設、81人以上が5施設であった。

利用者総数に対する精神疾患患者の割合別にみた施設数を表6に示す。精神疾患患者の利用が2割未満である施設は30施設であり、約半数であった。一方、利用者の半数以上が精神疾患患者である施設を合計すると11施設あり、約1割に達していた。利用者総数における精神疾患患者の割合を、痴呆とそれ以外の精神疾患別にみると、痴呆以外の精神疾患は57施設で2割未満の利用であった。痴呆以外の精神疾患が0%である施設も22施設あった。残りの42施設では、大半の施設が少人数であるが痴呆以外の精神疾患患者による利用があった。このうち、痴呆以

外の精神疾患患者の利用が80%以上を占める施設が3施設あり、これらは母体の精神科病院に併設されている施設であることや精神科看護を専門として開設していることなどの背景を有していた。

3. 訪問看護ステーションにおける社会資源の導入経験

現在までの社会資源の導入経験は、「あり」が34施設(53.1%)で、「ない」が30施設(46.9%)であった。

4. 精神疾患患者に対する訪問目的

精神疾患患者への訪問目的を複数回答で求めたところ、「病状観察」が56施設(87.5%)と最も多く、次いで「服薬管理」と「介護者支援」が43施設(67.2%)、「身の回りの世話」が39施設(60.9%)であった。また、「情報提供」が17施設(26.6%)、「その他」が14施設(21.9%)であった。「その他」の具体的な内容は、「リハビリテーション」が最も多く、他に「生活意欲の向上、主体性の回復」、「生活指導」、「受診指導」、「精神的援助」、「清潔管理」などが挙げられた。

表5 1か月間の利用者総数

	施設数	(%)
20人以下	12	(18.8)
21-40人	27	(42.2)
41-60人	13	(20.3)
61-80人	7	(10.9)
81-100人	4	(6.2)
101人以上	1	(1.6)
合計	64	(100.0)

表6 利用者総数に対する精神疾患患者(および痴呆・痴呆以外)の割合別にみた施設数

施設数(%)

割合	精神疾患患者	痴呆	痴呆以外の精神疾患
0%	4 (6.2)	7 (10.9)	22 (34.4)
10%未満(0%を除く)	12 (18.8)	16 (25.0)	31 (48.4)
10%以上 20%未満	14 (21.9)	16 (25.0)	4 (6.2)
20%以上 30%未満	6 (9.4)	4 (6.3)	1 (1.6)
30%以上 40%未満	10 (15.6)	12 (18.7)	0 (0)
40%以上 50%未満	7 (10.9)	5 (7.8)	1 (1.6)
50%以上 60%未満	1 (1.6)	0 (0)	0 (0)
60%以上 70%未満	2 (3.1)	2 (3.1)	2 (3.1)
70%以上 80%未満	3 (4.7)	1 (1.6)	0 (0)
80%以上 90%未満	2 (3.1)	1 (1.6)	2 (3.1)
90%以上100%	3 (4.7)	0 (0)	1 (1.6)
合計	64 (100.0)	64 (100.0)	64 (100.0)

5. 訪問看護師の意見

精神疾患患者に対する訪問看護の困難さを自由記載からみると、「精神疾患やうつ（病）の方は訪問回数が増える一方で、昼夜を問わず急な訪問依頼があり困難さを増す」、「痴呆は以前と比べて社会でも受け入れられるようになったが、まだ高血圧や脳卒中などのようには知られていない」、「痴呆患者が嫌がり通所サービス導入に時間がかかる」等があった。また、精神疾患患者の利用が少ない訪問看護ステーションにおいても、「研修会などがあれば参加したい」、「マニュアル等、情報があればほしい」など、少数ではあるが、精神疾患患者の看護について関心が示された。

考 察

協力の得られた訪問看護ステーションの9割は精神疾患患者への訪問を行っており、利用者総数における精神疾患患者の割合は3割であった。日本訪問看護振興財団が毎年実施する「訪問看護・家庭訪問基礎調査」の利用者3,590人のデータに基づいた精神科関連の情報によれば、「精神および行動の障害」は疾病大分類では5番目の12.7%（複数回答）である⁹⁾。本研究で回答が得られなかった半数近くの訪問看護ステーションにおいては、精神疾患患者の利用がないか少ないことが考えられる。全国的な動向と照らし合わせて、少なくとも利用者の1割以上に精神看護の専門的技術による対応が求められる現状であると推測される。

また、精神障害者の介護保険利用状況についての調査報告⁸⁾では、全国248市町村の回答から介護保険サービス提供施設、ケアマネージャー、ホームヘルパーから精神症状や問題行動のある事例について相談や支援を求められた市町村が半数以上存在していることや、介護老人福祉施設や訪問看護の利用において、痴呆性疾患、精神障害、知的障害または精神症状や問題行動のために、介護が著しく困難になったり、利用を中止したりした事例を経験した市町村が6割近く存在したことが報告されている。このように、介護保険領域での精神科の問題への対応が求められており、今後もこの傾向は強くなることが予測される。精神科のケースを積極的に扱う訪問看護ステーションは少なく、近隣の訪問看護ステーションより遠方の精神科病院からの訪問を受ける利用者が多い現状のなかで⁹⁾、今後訪問看護ステーション間で精神科を専門とする施設との連携の可能性や、行政との有機的な連携を充実させていく必要がある。

精神疾患患者への訪問看護では、地域での生活を包括的に捉えて、症状などのセルフコントロールができるように支援することが重要である¹⁾。また、精神疾患に加えて身体合併症を有する利用者が増えつつあり、身体的および精神的ケアの充実が求められる。本研究においても、訪問時に「病状観察」や「服薬管理」により症状のコントロール状況の確認に加えて、「介護者支援」を重視する傾向が明らかになった。「介護者支援」の一手段として社会資源の導入について調査したところ、開設時からの社会資源の導入については、半数以上のステーションにおいて経験があった。経験を有する施設を対象として、今後、導入の成果や問題点について、介護者家族の意向とともに把握することが課題として残された。

自由記載では、訪問回数の増加や急な訪問依頼の現状が示され、少数施設の複雑な状況が伺えた。制度的に診療報酬の側面からみても、訪問看護ステーションでは認められていない2人同行訪問が、病院からの精神科訪問看護には認められるなど、訪問看護ステーションにおいて精神疾患患者に対応することは厳しい状況にある。一般の訪問看護ステーションにおける精神疾患患者への訪問看護について対応困難な事例を質的に明らかにし、一施設内での対応ではなく地域連携のあり方を検討していく必要がある。

結 論

1. O県の訪問看護ステーション64施設における1か月間の利用者総数は2,471人で、そのうち精神疾患患者は約3割であった。また、精神疾患のうち痴呆は6割以上を占めた。
2. 訪問看護ステーションの利用者家族に対する社会資源の導入経験は、半数以上の施設にあった。
3. 精神疾患患者に対する訪問看護に困難さを感じている訪問看護師も少数あり、精神科看護に関する情報が求められていた。

謝 辞

本研究の実施にあたり、ご多忙中にもかかわらず調査にご協力くださいましたO県の訪問看護ステーションの皆様は心より深謝いたします。なお、本研究は平成14年度日本訪問看護振興財団の研究助成を受けて行ったものの一部である。

本研究の一部は第10回岡山県保健福祉学会におい

て発表した。なお、「痴呆」は「認知症」に変更されているが、本研究では調査時の用語を用いた。

文 献

- 1) 佐藤美穂子：訪問看護ステーションの現状と新たな展望．精神科看護，31(10)：10-15，2004.
- 2) 國吉 緑，堀之内歩，琉美智子，赤峰依子，真栄城千夏子，宇座美代子，渡嘉敷めぐみ：沖縄県における在宅要介護高齢者虐待に関する研究 看護職に対するアンケート調査より．琉球医学会誌，22(3-4)：109-119，2003.
- 3) 小林亜由美，高崎絹子，千葉由美，佐々木明子，小野ミツ：在宅における老人虐待事例の援助の分析 - 援助過程の質，および援助結果に影響を与える要因の検討 - ．老年看護学，5(1)：78-87，2000.
- 4) 野崎和子，木村麻紀，井上京子，渡邊久美，岡野初枝：訪問看護利用者に介護者の虐待がみられた事例の検討 - 在宅看護研究会を通して - ．家族看護学研究，9(2)：121，2003.
- 5) 日本訪問看護振興財団：平成15年度訪問看護・家庭訪問基礎調査報告，143，2004.
- 6) 丹下祐子，木村洋子，岸田貞子：精神障害を持つ家族の資源的条件と日常生活上の困難．精神科看護，66：65-71，1998.
- 7) 岩崎弥生，石川かおり，清水邦子，宮崎澄子：精神障害者の家族ケア提供上の対処家族の応答性と自己配慮．日本看護科学会雑誌，22(4)：21-32，2002.
- 8) 立森久照，竹島 正：介護保険領域で高まる精神保健ニーズ - 市町村などにおける高齢精神障害者の実態調査から．公衆衛生情報，34(5)：46-49，2004.
- 9) 末安民生，岩下清子，杉田美佐子，五月女幸子，仲野栄：精神科訪問看護の機能と役割 病院の訪問看護と訪問看護ステーションの比較調査から．精神科看護，31(10)：39-44．2004.

Investigation about the use of mental illness patients at visiting nursing stations in O prefecture

Kumi WATANABE, Kazuko SUMIYOSHI, Michiko MORIMOTO, and Hatsue OKANO

Abstract

The family which has a mental illness member is apt to worry about social appearance because of the stigma of the illness. Therefore, it is often difficult to introduce a social resource to such families. The purpose of this study is to clarify the status of usage of illness patients at visiting nursing stations, and find the problems of family care with such patients. The visiting nurses were surveyed about their experience that introducing social resources to families.

Questionnaire survey were administered on the 126 visiting nursing stations of O prefecture, that had an experience to introduce social resources to such families. The valid answers from 64 visiting nursing stations (50.8% of surveyed) were obtained. As a result, 93.8% of visiting nursing stations were utilized by mental illness. The illnesses of patients were dementia, depression and schizophrenia, and had been accepted at 57, 28, and 17 facilities respectively. More than half of facilities had introduced social resources to mental illness patients at first of the service beginning. But some of them feel troublesome to care mental illness patient, and seek for information about psychiatric nursing.

Key Words : Social resource, Visiting nursing station, Mental illness, Survey

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Okayama University Medical School